

東日本大震災で壊滅的な被害を受けた岩手県沿岸部の12市町村で唯一、死者、行方不明者、負傷者ともゼロだったまちがある。同県最北に位置する人口1万9千人余りの洋野町。揺れを感じた住民たちは、ひたすら高台を目指した。町内に防潮堤がない地域もあるが、住民は「だからこそ逃げる意識が強い」という。津波対策のあり方が議論される中、同町の実践は防災教育などに生かされそうだ。（報道本部 徳永仁）

同町には最高到達点15メートルの津波が押し寄せた。全壊や半壊などを合わせて住宅被害は53棟、漁業者の作業小屋など非住宅被害は124棟。漁船は全体の68%にあたる258隻が流出した。それでも犠牲者はいなかった。

習慣しみ付く

「逃げる習慣がしみ付いている」

洋野町内の海拔27メートルの高台に住む無職蔵義浩さん（68）は震災当日、地震から5〜10分後、海沿いの住民たちが車や駆け足で続々と高台に上ってくる様子

逃げる意識

人的被害ゼロ 岩手沿岸の洋野町

津波より高く



洋野町八木地区内にある海拔を示す看板と、高台への近道の前に立つ蔵義浩さん



防潮堤ない地区 高台へ近道整備

「約」といった看板が約20力所にある。3年前、い人がいたかもしれない地区で要望し、町に設置してもらった。防災意識の高さは、過去の大津波で多くの犠牲者を出したという背景もある。八木地区は明治三陸地震（1896年）の津波では住民の半数に当たる126人が死亡、昭和三陸地震（1933年）でも79人が亡くなった。蔵さんの親戚にあたる漁業蔵徳平さん（74）は震災当日、八木地区の港でカレイ漁用の網を作っていたが、地震後、網を投げ出して車で高台に逃げた。漁船や作業小屋などを失ったが、「防潮堤があつたら油断して、逃げなから、地震が起きたら即逃げる」と何度も言われてきた。

訓練でも訴え

洋野町を管轄する久慈消防署種市分署の庭野和義分署長（60）は「八木地区だけではなく、全町で『逃げる』を徹底することが功を奏した」と振り返る。

庭野分署長は3年前、県内の津波研究者の講演を聴いたのをきっかけに「逃げる」意識の重要性を再認識。年1回の町の防災訓練での訓示では「率先して避難者となれ」などと繰り返し訴えてきた。

を見て、あらためて感じた。

ルートを知

蔵さんが住む八木地区は町内でも特に「逃げる」意識が強い。町内のほとんどの沿岸地域には防潮堤があるが、約270世帯が住む八木地区には整備されていない。かつて建設が検討されたが、地権者の了解を得られなかった。

端には「ここは海拔10

には防潮堤に守られた地区もあり、その効果も大きい。ただ、それに頼り切らず、まず『逃げる』を徹底することがいかに大切か、よく分かったと話している。